

○ パビリオンの建物模型

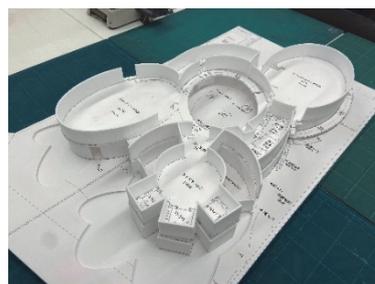
移動経路や避難計画の確認(2023年1月30日ワークショップ(第4回))では、来館者の移動経路を理解してもらいやすいよう建物の模型を用意し、視覚障がい者にはワークショップ開始前に確認してもらった。また、当日欠席した方には別途説明した。建物模型は視覚障がい者に配慮し用意したものだったが、多くの参加者から理解しやすいと好評だった。



模型を使って移動経路を確認している様子



建物模型(1F)



建物模型(2F)

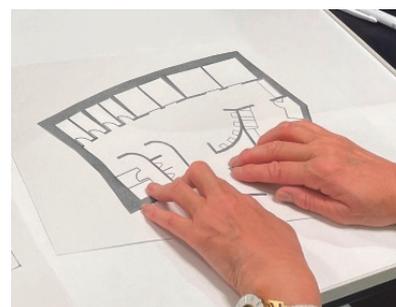
3.4.2 視覚障がい者に配慮した資料

○ ワードデータ

視覚障がい者には、読み上げ音声で確認することができるよう資料を文字化したワードデータを作成し、説明資料とあわせて事前送付した。

○ 立体コピー

建物やトイレの平面プランといった図面資料は文字化したワードデータで伝えることが難しいため、指で触って確認できるよう、図面の輪郭線が盛り上がるように印刷した立体コピーを手配し事前に郵送した。立体コピーの作成にあたっては、図面をそのまま立体化せず、必要な情報を抽出し立体化した。トイレの場合は、壁やトイレブース、便器、手洗い等のみを記載。必要に応じて点字を記載したが、その場合は事務局で点字を作成しシールで貼り付けた。



立体コピーを確認している様子

3.5 会場までの案内

○ 車いす使用者への配慮

最寄駅から会場まで車いす使用者が移動しやすいルートを確認のうえ経路案内を作成し、事前送付した。また、車いす使用者が利用できるトイレも事前に確認し、当日受付で伝えた。会場にない場合は、会場外のトイレを確認し案内した。

○最寄り駅から会場までの案内

視覚障がい者が一人で来られる場合は、会場の最寄り駅に迎えに行き会場まで同行した。また視覚障がい者からの依頼で、言葉による説明で目的地まで案内する「言葉の地図」を作成し事前に送付したこともあった。

3.6 当日の進行、説明

開始までに、最寄駅からの誘導や手話通訳者との打合せ、機器の動作確認といった情報保障手段の確認等を進める。開始時には、発言の際は一人ずつゆっくりと簡潔に話すこと等の注意事項を伝える。

進行は、事前に設定した配分時間に沿いつつ、意見交換の状況を踏まえあらかじめ想定した範囲で進める。意見交換の時間が長い場合は、休憩のタイミングを班のファシリテーターに委ねても差し支えない。また、司会やファシリテーターが慣れない場合や議題、参加者の経験によって場の環境が異なることから、議論が白熱し進行が滞る場合がある。今回の経験を踏まえると、そういった場合にどうするかあらかじめ参加者で確認しておくこともひとつの方法である。

3.6.1 聴覚障がい者への配慮

聴覚障がい者への情報保障の手段として、手話通訳、要約筆記^{*1}、UDトーク^{*2}を利用した。聴覚障がい者によって、手話を必要とする方やUDトークを利用する方等ニーズが異なるため、事前に確認のうえ準備する必要がある。

今回は、対面は手話通訳、オンラインは要約筆記の手配を基本とした。また、当事者にUDトークの利用者がいたことから、当事者のマイクをお借りし説明や意見交換で使用した。いずれの場合も、発言者は一人ずつゆっくりと話す必要があり、参加者には開始前にそのことを伝えておく必要がある。

UDトークを利用する機会が少なく、また事務局が不慣れだったことから円滑に進行しないことがあった。以下、反省を記載しておく。

要約筆記及びUDトークの利用に関する反省

要約筆記	・要約筆記はオンライン会議のみの手配としていたが、対面の会議であっても要約筆記を手配し、会場内のモニターに文字を投影することがのぞましい。
UDトーク	・当事者の音声認識マイクを借りていたが、事務局が準備すべきと意見があった。 ・ワークショップ開始までに音声認識マイクの動作確認とネットワーク等の設定が終わらず、開始まで時間を要することがあった。 ・会場のネットワーク環境が悪いと、発言を読み込むまでに時間がかかり、聴覚障がい者がリアルタイムで発言を把握できず、対話から取り残されてしまった。 ・話すスピードが速いと、文字修正が追い付かないこともあった。文字修正は2名での対応がのぞましい。

- *1 要約筆記：発言者の話の内容を把握し、それを文字にして伝える障がい者と障がいのない人の意思疎通を支援するサービス。リアルタイムでモニターに表示するアプリがさまざまある。
- *2 UDトーク：会話音声テキスト化しコミュニケーションをサポートするアプリ。原文の修正もできる。専用マイクを使用することで文字認識の正確さが向上する。通常オンライン環境で使用する。

3.6.2 小さな声への配慮

参加しやすい場・環境づくりのため、配慮が行き届かなかった部分もあったが、全16回のワークショップを通じて、事務局を含めた参加者それぞれが他の人のお困りごとへの配慮を考えるようになり、ワークショップの前後の時間や休憩時間には自然とコミュニケーションが生まれた。参加しやすい雰囲気がつくられた結果、会期後に開催した2026年3月2日の最終ワークショップ（第16回）では、当事者から以下の振り返りコメントがあった。

- ・みんなが知的障がいの息子によく声掛けをしてくれた。息子も参加している感触を持ち、息子自身も行きたいと思える参加しやすい雰囲気があった。
- ・自閉症の息子は大勢の場が苦手であるが、ワークショップには参加できていた。事務局には何でも受け入れてくれる雰囲気があり、本当に良い点だと感じた。
- ・ワークショップ会場までのアクセス（エレベーターの場所含む）をいつも事前に教えてくれて大変助かった。このような配慮があったので積極的にワークショップに参加する気持ちになれた。

3.6.3 LGBTQ+の方への配慮(説明や声掛けの際の注意事項)

LGBTQ+の方から、「参加者がルールを理解していない状況でのワークショップの参加について不安を感じる」との意見を踏まえ、ワークショップ開始前にグランドルール*を共有した。

具体的には、第13回ワークショップ（アテンダント研修の検討）において当事者から意見があり、第14回ワークショップ（アテンダント座学研修）で対応した。

- *グランドルール：会議等の場の心理的安全性と対話の質を高めるための参加者全員が守るべき基本的なルールや原則

3.7 ワorkshop後のまとめや対応

ワークショップ後は、ワークショップでの意見を速やかに整理し、対応や今後の進め方を検討のうえ、内容に応じてメールや以降開催するワークショップでメンバーに報告、共有した。

また、ワークショップに欠席した当事者には、必要に応じて別途個別にワークショップの内容等を説明した。

4 当事者参画の先導となる成果(レガシー)

大阪ヘルスケアパビリオンにおけるユニバーサルデザインの取組みは、単に施設のバリアフリー化を進めることにとどまらず、多様な人々が主体として参画する新しいまちづくりのプロセスを実践した点に特徴がある。

本プロジェクトでは、当事者を「意見を聞く対象」として位置づけるのではなく、設計者、企業、事務局（行政）とともに検討を進める対等なパートナーとして参画することを基本的な考え方とした。

そのためには、参加の機会を広げるだけでは十分ではなく、参加の場そのものをユニバーサルに設計し、誰もが主体として関わることのできる環境を整える必要がある。また、主体として参画ということは、単に要望を述べることにとどまらず、他者の立場や制約を理解しながら、ともに解決策を模索する責任を分かち合うことでもある。

本章では、約4年間にわたる取組みを通じて得られた知見を整理し、今後の公共的事業における当事者参画の実践に資するレガシーとして、次の三つの観点からまとめる。

- 1.参画プロセスそのもののユニバーサル化
- 2.「小さな声」の主体化による参加主体の拡張
- 3.設計から運営まで連続した共創の実践

4.1 参画プロセスのユニバーサル化 ～対等で主体的な参加を可能にする場の設計～

本プロジェクトでは、検討の場そのものが参加の障壁とならないよう、参画プロセスをユニバーサルに設計することを基本方針とした。

従来の施設整備では、専門家が作成した案に対して当事者の意見を聴取する形式が多く、検討の主導権は専門家側に置かれることが少なくなかった。本プロジェクトではその関係性を見直し、当事者、設計者、企業関係者、事務局（行政）が対等な立場で議論する場を構築することをめざした。

そのため、形式的な会議ではなく、少人数によるワークショップを中心に検討を進めた。議論のテーマや論点を明確にしたうえで、参加者が経験や課題を共有しながら検討を深めることができるよう工夫した。また、当事者自身が議論のリーダー役を担う場面も設けるなど、主体的な参加を促す進行を行った。その象徴的な例が「みんなトイレ」の検討である。みんなトイレの取組みでは特定の設計案を前提とせず、白紙の状態から当事者、設計者、関係者が共に議論を重ねながら空間のあり方を検討した。

また、対等で主体的な参加を実現するためには、情報保障の徹底が不可欠である。参加者が同じ情報を共有し、内容を十分に理解したうえで議論に加わることができなければ、形式的に参加していても実質的な対等性は確保されない。

そのため、本プロジェクトでは視覚障がい者への立体コピーや模型の活用、聴覚障がい者への手話通訳や要約筆記の配置、知的障がいのある人へのモックアップや素材サンプルの活用など、多層的な情報保障を行った。これらの情報保障は、特定の障がいのある人のための配慮にとどまるものではない。建築の専門家ではない参加者を含め、すべての参加者が理解を共有し、対等な立場で議論に参加するための基盤となった。

このように、参加の機会を提供するだけでなく、主体的かつ対等な議論を可能にする場の設計を行ったことが、本プロジェクトの重要な成果である。

4.2 「小さな声」の主体化 ～参加主体の拡張～

本プロジェクトのもう一つの特徴は、これまでまちづくりの主体として位置づけられてこなかった人びとの参画を実現した点にある。

本章で「小さな声」と呼んでいるのは、まちづくりに参加する機会を持たず、客体として扱われることの多かった人びとである。社会の担い手として十分に認識されないまま、意思決定の場から距離を置かれてきた人びとの経験や視点は、ユニバーサルデザインを考えるうえで不可欠である。

障がい者運動のスローガンに「私たちのことを、私たち抜きで決めないで (Nothing about us without us)」という言葉がある。本プロジェクトにおける当事者参画も、この考え方を背景にしている。ここで強調されているのは「私」ではなく「私たち」である。個人の意見を聞くことにとどまらず、多様な当事者が主体として議論に参加し、それぞれの経験や視点を持ち寄りながら共に意思決定に関わることが重要である。

主体として参加するということは、単に要望を述べるだけではなく、他の参加者の視点や制約を理解しながら議論に関わることである。本プロジェクトでは、当事者が課題を提示するだけでなく、解決策をともに考える主体として参画したことに大きな意義がある。

また、すべての当事者が自らの経験やニーズを言葉で表現できるわけではない。重度の知的障がいのある人や医療的ケアが必要な人など、意見を言語化することが難しい人もいる。本プロジェクトでは、そのような人びとも可能な限り検討の場に参加できるよう配慮した。言葉による発言の有無にかかわらず、その場に共にいること自体が重要である。多様な当事者が同じ場に存在することは、参加者の意識や議論の方向を変え、これまで見過ごされてきた視点を検討の過程に組み込む契機となる。

このように、本プロジェクトでは当事者参画を、意見聴取にとどまらない、共に場をつくるプロセスとして位置づけた。

4.3 設計から運営まで連続した共創の実践 ～ハードとソフトをつなぐ当事者参画～

本プロジェクトでは基本設計から実施設計、施工、展示計画、運営に至るまで、当事者参画による検討を継続的に行った。

多くの施設整備では、当事者参加は設計段階に限定されることが多い。しかし、本パビリオンでは、建築、展示、情報提供、サービスを含めた総合的なユニバーサルデザインをめざし、運営面にも当事者参画を取り入れた。

その結果、同一動線による体験の確保、「みんなトイレ」やカームダウン・クールダウンルームの整備、視覚障がい者向け誘導システムの導入など、多様な利用者に配慮したハード整備が実現した。

さらに、利用者と直接接するアテンダントの役割を重視し、当事者参画による研修を実施した。研修では、当事者自身が日常生活の中で経験している困難や配慮のポイントを共有し、アテンダントが利用者の立場を理解しながら対応を考える機会を設けた。こうした取組みを通じて、アテンダントは単なる運営スタッフではなく、ユニバーサルデザインをとともに実践する共創の仲間としてプロジェクトに関わることとなった。

また、本プロジェクトでは開幕後も改善を継続することを重視した。会期中には、当事者や来館者からの意見を踏まえ、サインや案内方法、設備の運用など改善可能な事項について随時見直しを行った。

このように、設計段階の検討にとどまらず、運営や利用状況の検証を通じて改善を続けるPDCAサイクルによる継続的な共創の取組みを実践したことは、本プロジェクトの重要な特徴である。



4.4 総括

大阪ヘルスケアパビリオンにおける当事者参画の取組みは、個別の合理的配慮の実施にとどまらず、これまで検討過程に十分に反映されにくかった「小さな声」を計画段階から組み込む仕組みを構築した点に特徴がある。

また、当事者、設計者、企業関係者、事務局（行政）、そしてアテンダントなど多様な主体が対等なパートナーとして議論を重ねたことにより、参画の場は単なる意見聴取の場を超え、課題解決をともに模索する共創の場へと発展した。

本プロジェクトでは、参画プロセスのユニバーサル化、「小さな声」の主体化、そして設計から運営まで連続した共創の実践という三つの側面から、新しい当事者参画のあり方を試みた。

まちづくりにおいては、これまで社会の担い手として認識されにくかった人びとの経験や視点、すなわち「小さな声」が十分に反映されてこなかった側面がある。本プロジェクトで試みた当事者参画の取組みは、そうした声を社会の中に位置づけ直し、多様な主体がともに社会をつくるための実践である。

こうした取組みは特別なプロジェクトとして終わらせるべきものではない。多様な人びとが主体として参画し、ともに考え、ともに解決策を生み出していくプロセスを社会の中で広く実践していくことが求められる。本プロジェクトで得られた知見と経験が、今後の社会において継承され、広がっていくことが期待される。

5 振り返り(UD推進チームメンバー)

5.1 お困りごと当事者

○伊良原 淳也

私が特に印象に残ることは取り組み終盤での、アテンダント担当者さんとの意見交換会です。参加者の中には、「休職や退職して万博に携わりたかった」旨のお話が複数あり、参加者皆さんの「万博を成功させたい」という熱意に身が引き締められました。短時間でありましたがとても貴重で有意義な時間を過ごすことが出来たことに感謝申し上げます。

○植木 智

当事者委員として参画する中で、オールジェンダートイレやカームダウン・クールダウンルーム等が、設置にとどまらず、設計前から当事者の困りごとを起点に検討された点が印象的でした。ワークショップやモックアップを通じて、既存のバリアフリーを超え、可視化されにくい困りごとにも焦点が当てられ、多様な当事者の声が息づく空間になったと感じます。この姿勢が未来の共生社会に引き継がれることを期待します。

○海老澤 弥生

視覚障害の特性上、立体コピー等の配慮があっても状況把握が難しく、計画が具体化した終盤に重大な課題に気づきました。「見えないと楽しめない」と正直な思いを伝えたところ、関係者の皆様がヒアリングの場を設け、真摯に耳を傾けてくださいました。この柔軟な対話が大きな転機となり、最新技術「音声情報提供アプリ」(NaviLens)の導入という挑戦が実現。開幕後も移動サポートを改善するなど、当事者と共に考え、運用し続けた丁寧な共創プロセスこそが、未来へのレガシーです。見えなくても心から楽しめる、温かいパビリオンになったと感じています。



○岡田 多栄子

それぞれの立場の意見を言わなくてはとなりがちなのに、皆様他の方の話をきちんと聴かれる姿勢は素晴らしく、学びとなりました。「ナビレンス」をたくさんつけて下さり、説明文を考えるのにご苦労いただいた方々には感謝しかありません。一つ残念だったのは、スタッフさんの研修に当事者を招いて意見を聴いていただきとても嬉しかったのですが、最後に次回の現地での研修の案内をプロジェクターに出されて、口頭での説明がなされず、視覚障害者はどこに何時に行けばいいのかもわからず、今まで誰もが参加できることを目指して取り組んできた2年間だったのにと正直がっかりしました。

○尾上 浩二

今回の大阪パビリオンの取り組みは特筆すべきものでした。障害当事者もメンバーとなった「UD推進チーム」が結成され、一緒に考えながら検討が進められました。その象徴がみんなトイレです。モックアップをもとに、グループに分かれ検討した成果が活かされました。最初から最後まで当事者参画を進め、「成解」を皆で作りに出していくプロセスでした。今後のバリアフリーの大きなテーマは当事者参画。その先駆けとして、この取り組みがレガシーとして継続することを願います。

○岸本 慶子

私はパビリオンの検討プロセスから、みんなが参加しやすくなってよかったと感じています。それを特に感じたのはトイレの配置について、模型を使って意見を出しあったときです。絵を描いたりふせんを貼り付ける方法では、視覚障害のある私は参加しにくいのですが、模型を触って確認できることによって参加している実感を持つことができました。パビリオン全体をみると、実現できなかったこともあると思います。今後他のイベントでは技術の進歩を踏まえて更にUDが進むことを期待し、私自身も今回の貴重な経験を活動に活かしていきたいと思っています。

○小尾 隆一

当初から、当事者参画のむつかしさを痛感する取組だった。ユニバーサルデザインと言いつつ、知的障害者を排除してしまっているのではないかという問いはそこにはあった。しかし、当事者である知的障害者はそのような状況を理解し、的確に、それも設定された会議の場所と時間で表明することは極めて困難であろう。わかりやすい情報提供やいくつかの成功事例を取り入れること、そして、社会の理解につながる見える化を実践することが、この万博という舞台に必要なと思った。わかりやすいパンフレット、紹介動画、カームダウン・クールダウンルーム、広めのトイレ、穏やかなアテンダント…

○神徳 佳子

UD会議では、様々な立場からの意見を聴かせてもらい、気づかせてもらうことが多くありました。特にトイレに関する検討会では、「ああしたら?」、「こうしたらいいね」と楽しく意見を出し合うことができました。また、スタッフ研修にも参加させてもらい、私たちのことを理解してもらえたと思います。本会議で、今まで以上にその人の立場から考え、気づくことが大切であるということを経験してもらいました。UD会議に参加できて本当に良かったと思っています。

○鈴木 千春

全体的な期日制限があった中でも、大阪パビリオンのUDに対する取り組みは多様な当事者の声を聞こうとしてくれました。私はWEBのみ参加でしたが、ほぼ全行程を視聴し他の参加者の意見も共有することができたことは大変心強かったです。当事者により必要な情報保障を提供して「情報を知る・意見を出す・課題を共有する・試す・設定を考える」ことを繰り返していくことが丁寧に行われることの大切さを私自身も学ぶことができてよかったです。

○田中 世生・美紀(親)

石塚裕子先生との出会いをきっかけに、医療的ケアのある当事者、介護用車いすのユーザーとしてユニバーサルデザイン推進委員に参加させていただきました。2022年から始まった検討のワークショップのなかでも特に「みんなのトイレ」の検討では、さまざまな障害特性、子育て、LGBTQ+など多様な立場の方々と意見を重ね、困りごとの違いを知り合う過程そのものがユニバーサルデザインなんだと実感しました。私たちの声が反映された空間や動線、スタッフのホスピタリティなどが生み出されたこの過程が、万博終了後も未来へと脈々と受け継がれていくことを願っています。



○西村 秀樹

今回の活動は、私にとって多くの気づきと出会いがありました。パビリオンへの入館は予約が取れずにかないませんでした。私の頭の中には、みんなで考えたトイレのモックアップ検証の場面や、ナビレンスが伝えてくれる情報の検証をしている場面などがついこの間のことのように思い出されます。万博は終わってしまいましたが、この活動で培ったものは、必ず未来へ引き継がれるものと信じています。みなさん、ありがとうございました。

○橋口 亜希子

発達障害を手がかりとしても大阪パビリオンのUDが考えられ、その歴史的取組が世界へと引き継がれていくことはとても画期的であり、見えにくい困りごとで万博には行けないとあきらめていた人たちの「行ける希望」になったと感じています。そして、56年前の大阪万博に訪れた両親と次の世代を担っていく息子と娘に、一生に一度でしかないこの歴史的取組に携わった姿を見せられたことに、大きな喜びと深い感謝の気持ちでいっぱいです。



○濱崎 はるか

多様な当事者の関わりによって、性別にかかわらず誰もが利用しやすいトイレ、異性介助でも、異性の家族連れでも利用しやすい画期的なトイレができました！完成後実際に利用したときにとっても使いやすかったので、一緒に考えたひとりとして非常に感動しました。トイレ入口の左の壁に設置されたコンセプトボードが素敵でした。アテンダント研修も含め、完成に至るまでの間、LGBTQ+のひとりとして確認できる貴重な機会でした。

○原 弘幸

大阪ヘルスケアパビリオンでのUD推進活動を振り返りますと、ワークショップを通じて当事者の声が実際の形として反映されたことが強く印象に残っています。意見交換を重ねながら、トイレの使いやすさを利用者目線で振り返り、具体的な改善点を共有できたことは貴重な経験でした。特に聴覚障害者の視点からは、気づきや配慮を共有し、お互いが歩み寄る大切さを実感しました。まさに、「私たちのことを、私たち抜きに決めないで (Nothing About Us Without Us)」を表現した、人生で初めて最後と思えるほど心に残る体験でした。

○堀 篤子

大阪ヘルスケアパビリオンのユニバーサルデザインの取り組みでは、多様な当事者とスタッフが一緒になって創り上げる姿勢を大切にされていたことが、たいへん嬉しく印象に残りました。特に、「みんなトイレ」のワークショップやモックアップの実施、当事者参画による研修は非常に意義深い取り組みだったと思います。また、単に構造面を議論するだけでなく、「どうすれば万博を共に楽しめるか」という視点を大切にいただいたことも重要だと感じました。今後の当事者参画を進めるうえでの先進事例として、ぜひ参考にしていただきたいと思います。



○前野 奨

大阪ヘルスケアパビリオンのUDワークショップに参加し、ユニバーサルデザインの重要性を改めて実感しました。年齢や国籍、障がいの有無に関係なく、すべての人が安心して利用できる空間やサービスを考えることは、これからの社会において不可欠であると感じました。多様な立場を想像する力の大切さや、参加者同士の意見交換を通して、多様な価値観に触れられたことも大きな学びでした。今回の経験を、今後の生活や仕事、地域活動の中でも活かしていきたいと思います。



○森本 琉久・純子(親)

2025年大阪・関西万博に携われたことは、私の一生の思い出です。全介助で生活する私の特性を「大阪ヘルスケアパビリオン」やトイレの構想に活かされたことが何より嬉しい。誰かの役に立てた実感が最高の宝物です。アテンダント様との交流や勉強会が一番の思い出です。実際に訪れた際、声をかけてもらい携わった日々の実感がわきました。



多くのパビリオンの中でも、想いが詰まった大阪ヘルスケアパビリオンが私にとって最高です。

○吉川 ひとみ

精神障害の当事者として大阪パビリオンのUD活動に参加できたことを、心よりうれしく思います。複数回のグループワークを通して、障害の垣根を越えながら困りごとの解決を一緒に考え、主体的に関わる貴重な経験となりました。今後もこのような当事者が大切にされる取り組みが続いていくことを願っています。



○吉川 竜三・和信(親)

多様な人々との交流を通じ、多くの学びを得られた素晴らしい経験でした。コンセプトパネルに自分の姿を見つけた時は、誇らしい気持ちで周囲に自慢してしまいました。特に印象的だったのは、引率の先生が「性別の区別なく、どこでも使っていいですよ」と生徒に伝えていた場面です。万博の理念が現場に浸透していることを実感し、深く胸を打ちました。万博を身近に感じられたこの夢のような時間に携われたことを、心から誇りに思います。



○吉田 豊・琴美(親)

今回、知的障害を伴う自閉症の豊がUD推進委員として、貴重な体験をさせていただき、ありがとうございました。初めて会議に参加する際に豊がパニックになりご迷惑をかけないかと不安を感じていましたが、皆さんのあたたかい雰囲気の中、不穏になることなく参加することができました。又、会議では、他の障害のある方のニーズを知ることができて、とても実りのある時間を過ごせました。今後も障害のある人の声が届く機会が増えることを願っています。

○六條 友聡

大阪パビリオンのUDチームに2022年から参加し、大阪・関西万博が開催されるまで関わらせていただきました。チームでは、多様な当事者の方々とヒアリング、ワークショップ、モックアップ、現地検証、スタッフ研修などが進められました。その中でもワークショップでは、多様な当事者の方々と意見交換をすることで、お互いのことを深く知る機会となり、多くの発見がありました。モックアップを通じてお互いに知り得たことを活かすことができました。また、スタッフの方も柔軟に対応して下さり、非常に良い会場になったと感じています。



○渡部 安世

大阪ヘルスケアパビリオンでは、基本設計段階から共につくる姿勢が貫かれ、「要望する当事者」「要望される非当事者」の垣根なく取り組むことができました。案内スタッフのジェスチャーやポッドのテロップが実現し、また、会期中も入場口や動線の改善、UD展示が創られ、関わられたことを光榮に思いました。手話や音声認識などの情報アクセシビリティは今回実現に至りませんでした。スタッフ皆さんの心に残り、次回に力を発揮されることを願っています。約4年間、ありがとうございました。



5.2 作り手企業

○株式会社サイエンス 平江 真輝

みんなトイレに手洗い器を設置させて頂きました。万博が始まった当初は、使い方の説明や対応の不慣れに加えて、機器類の稼働時間と使用者数が適切でなく、行列ができてしまうなど様々な修正が必要になると判断しました。これからの半年間に不安を感じた時に、対応していたお客様から「外出先で初めて手洗いが出来た。」「楽しく手をキレイにできる。」と本当にうれしいお声を頂き、正直「外出先で初めて」と言われたときは感無量で涙がでました。この言葉は、万博期間中も今も、これからも私の中にずっと残ります。



○株式会社シブタニ 玉木 宏昌

大阪ヘルスケアパビリオン「みんなトイレ」へのトイレ鍵納入にあたり、導入検討段階からワークショップに参加し、実際に様々な方々のご意見を直接伺い、日常の中で感じる不安や使いづらさを共有いただいたことは大きな財産となりました。これからも“みんな”が安心して使える操作性と安全性を今後も提供したいと思います。



○TOTO 株式会社 仲川 亜希

皆さまと共にトイレの設計に向き合い、困りごとや想いを直接伺えたことで、今のトイレにはまだ進化の余地が大きく残されていることを実感しました。この学びを多くの人と共有し、より良いトイレづくりへとつなげていきます。多様な社会に応える新しいトイレのカタチをひとつ示せたことは、大きな前進でした。今回の出会いに深く感謝し、皆さまの顔を思い浮かべながら、今後も取り組みを続けてまいります。ありがとうございました。



5.3 業務受託者

○株式会社東畑建築事務所 平野尉仁、小島茂也、武藤優哉、中野美咲、田村信幸（建築設計）

幾度のワークショップや会議を通じて、設計者目線のみでは行き届かない部分に至るまでご意見をいただき、設計に反映することができました。単なる基準遵守にとどまらず、当事者の皆様と直接対話することの重要性を改めて実感しました。一方で、実際に使ってみて判明した新たな課題もあります。この活動がゴールではなく、今後もインクルーシブな空間づくりをめざしていきたいと考えています。貴重な機会をいただきありがとうございました。



○株式会社竹中工務店 三枝 大介（建築施工）

当社は「みんなトイレ」の施工者としてこのプロジェクトに携わらせていただきました。当初はジェンダーフリーのトイレという認識でしたが、UDの取り組みを通じて、すべての人に使いやすい開かれたトイレという理解へ至りました。認識の転換点は、実大サイズの図面作成のご相談をいただいた時でした。10m×15mほどの実大トイレ図面を会場に広げたところ、その上で皆様が真摯に意見を交わされる姿を拝見しました。その光景を通して、「皆様の思いを形にしよう」「ワークショップからの意見には可能な限りお応えしよう」という思いを強くしました。「みんなトイレ」は皆様の思いに少しでも近づくことができただけでしょうか。この取り組みを通じて、皆様の理想の未来に少しでも貢献できたとすれば、私たち施工者にとってこれ以上の喜びはありません。この度は、貴重な機会をいただき、ありがとうございました。



○株式会社アクセスムーブコンフォート 北山 ともこ（ナビレンス）

弊社はNaviLensの導入支援を担当しました。図面検討から現場での実地検証まで、常に視覚障害当事者のかたにご意見をいただきながら、大阪ヘルスケアパビリオン様、乃村工芸社様と共に、何度も修正を繰り返しました。開幕後、当事者の方から「取り残され感が軽減しました」とのお言葉をいただけたことは、何よりの励みになりました。多くの反響を糧に、今回の学びを全国へ広げ、誰もが安心して楽しんでいる街づくりにこれからも貢献してまいります。



○株式会社乃村工藝社 岸田 匡平、佐藤 光、森 浩昭、山地 好古（展示設計・施工）

UD推進チームの活動は、当事者の皆さん、事務局の皆さん、そして企画設計者みんなで展示の楽しさを探し当てる贅沢なプロセスでした。ワークショップで理想を語り合い、実物大模型でセンサーの場所や文字サイズをミリ単位で微調整する。現地ではナビレンスコードの位置



を巡って「もっと上、上、いや下だよ」なんて賑やかに。正解を押し付けず、対話から生まれる「なるほど!」を互いに話し合い、悩み考え抜いたパビリオンには、確かな優しさが宿っていたはず。ミライは、案外こんな楽しさから生まれているのかもしれない。

○Whatever co. 藤原 慎哉（展示コンテンツ）

「リボン体験ルート」において、要望がありながら実現に至らなかった心残りが「物理ボタン」の導入です。操作効率や表示の利便性から「タッチモニター」の導入を前提としていましたが、ワークショップを通じ、幅広い層のアクセシビリティを確保するための物理ボタンやパネルの有効性を再認識しました。現在、物理とモニター双方の長所を併せ持つようなデバイスの研究も進められているため、そういった事例も参考にしながら、より多くの人が快適に利用できる体験デザインの追求をめざしていきたいと思っています。



○BIPROGY株式会社 米井 瑞杜（システム）

従来はガイドラインを参考に、すべての機能を平等に提供することを意識してきましたが、検討会を通じて、内容に応じて選べる仕組みや、体験に参加しやすくする工夫そのものが大切だと気づきました。画一的な対応ではなく、利用者それぞれの状況に寄り添うことで、より無理のない体験につながると感じました。技術的な正しさだけでなく、使う人の立場を想像しながら設計する視点を、今後のシステム開発に活かしていきたいです。



○株式会社アビ 井上 由美子（運営）

開幕前のアテンダント座学研修では、資料学習に加え、パビリオンに近い環境でUD当事者の皆様から実体験や困りごとを直接伺いました。パビリオンの現地研修では、各持ち場で実際の接客を想定した具体的な助言を受けたことが大きな学びとなりました。これらの経験により、会期中は自信をもって接客でき来館者に安心感を提供できました。閉幕後もアテンダント個人のレガシーとして実社会で活かせる力になったと感じています。



5.4 事務局

○本村 直弥（運営担当）

アテンダント研修では、研修計画の段階から貴重なご意見をいただきました。座学研修・現地研修ともに活発な意見交換を行うことができ、実りある研修となるとともに、当事者のみなさまと一緒にユニバーサルサービスの視点を踏まえた運営体制を構築することができました。私自身も対応時の心構えや留意すべき点を事前に把握することができ、会期中は落ち着いて運営にあたることができました。本取組みを通して得た知識と経験を今後も活かしてまいります。ありがとうございました。



○山本 梨果（接遇担当）

アテンダント座学研修は、アテンダントさんやUD推進チームの皆様が100人以上集まり、対話する熱気ある場でした。研修に参加させていただいたおかげで、会期中に接遇担当として案内する際の心構えが変わったと思います。また、VIPに「みんなトイレ」や「ヒカリの坂道」の説明を行う際には、ワークショップを重ね多くの方の意見を反映してつくり上げたパビリオンであると自信を持って説明することができました。ありがとうございました。



○山内 秀幸（催事担当）

会期中、パビリオンで「みんなトイレ」や「ナビレンス」の取り組みを知られたお客様より、「素晴らしい取り組みだ」とのお声を幾度かいただきました。UD推進チームによる一連の取り組みは、多くの方の気づきや発見につながったと確信しています。こうした大阪・関西万博での多くの気づきや発見が、ミライでは「当たり前」になっていることを願いつつ、このチームの成果を心に刻みながら今後の業務につなげていきます。皆様、本当にありがとうございました。



○小滝 真美（広報担当）

広報担当としてパビリオンをご案内中、ある記者さんから「みんなが同じルートで、同じように体験できるパビリオンって実はなかなかない。素晴らしいですね」と褒めていただいたことがあります。パビリオンとしてのこだわりが伝わっているんだと嬉しくなりました。実際、パビリオンはいつもたくさんの笑顔で溢れていました。そんな場所に携われた経験は、私の宝物です。これから先、もっと誰にでも優しい世界が広がっていけばいいなと思います。



○北村 伸子（建築担当）

この取り組みを通じて、お困りごとを知ることの大切さを知りました。当事者メンバーから直接お困りごとを聞くことができたから、業務を進めていく過程でお困りごとを想像しながら考えていくことができたと思います。どうしたらいいんやろうと悩んで行き詰まることもありました。でも、推進チームのメンバーと一緒に考えることができたから、苦しくも楽しいと思いながら最後までやりきることができました。ありがとうございました。



○木下 茂樹（展示担当）

2024年5月大阪パビリオンに異動して初めてのワークショップ、当事者のみなさんからの意見で使いづらい人や楽しめない人がいることを知りました。以降、対話を重ねて自然と「この人はどう使うだろう、あの人はどう楽しむだろう」と姿を思い浮かべ考えるようになりました。「みんな一緒に」楽しめることがあたりまえの社会となることに貢献できるようUD推進チームの活動で得た気づきを思い返し行動していきたいと思えます。



○田中 聡（展示担当）

展示担当としてUD推進チームに関わり、ワークショップではファシリテーターを務めました。ワークショップでは、障がいの属性によって正反対のご意見をいただくことや、実現が出来なかったご意見もいただきました。それでも、毎回の率直な議論があったからこそ、お互いを知り、尊重し、思いやった結果の大阪ヘルスケアパビリオンだったと思います。誰もが同じように楽しめる、快適に過ごせる空間に至るにはまだまだ遠い道のりであると思いますが、今回の取組みで前進したことは確かだと思います。残りの人生、思いやりの心を持って生きていきたいと思えます。ありがとうございました。



○平谷 忠雄（大阪パビリオンUD担当）

2022年3月、当事者のみなさんからお話を聞くところからはじまったUDのチャレンジは、回を追うごとに、作り手企業や受託者、事務局のメンバーが増え、みんなの想いがどんどんひろがっていきました。会期中にはなんとかUDひろばをオープンできて、みんなの取組みと想いが伝わり、UDの取組みが幸せにつながっていくというメッセージがアトリウムに溢れました。かけがえのない、そして一生忘れられないこの4年3か月の思い出とともに、これからもがんばりますのでよろしくお願いします！



おわりに

みんなで共に創る楽しさを未来へ

大阪ヘルスケアパビリオンにおけるユニバーサルデザインの取組みは、私のユニバーサルデザインに関わる実務・研究人生の中で、最も楽しく、確かな手ごたえを得た経験であり、今後の実践を考えるうえでの大切な指標となるものとなりました。当事者の皆さんをはじめ、協力企業、設計者、事務局の皆さまに心より感謝申し上げます。



石塚 裕子

まちづくりや空間づくりの過程では、社会の担い手として十分に認識されていないことから、計画や意思決定の場に参加する主体として位置づけられていない人びとが、いまだ多く存在しています。私が「小さな声」と呼んでいるのは、そのようにまちづくりの客体として扱われ、主体として参画する機会を持たない人びとのことです。ユニバーサルデザインの実践において重要なのは、そうした人びとが、単に意見を聞かれる存在としてではなく、共に考え、共に創る主体として参画できる場をいかに実現するかということです。そのためには、参加の場そのものを丁寧にデザインする工夫と、新たな取組みに踏み出す姿勢が求められます。

本プロジェクトは、ハードだけでなくソフト（運営）まで一貫して当事者参画で取り組んだ、他に類を見ない実践となりました。特に「みんなトイレ」のワークショップでは、解決策を専門家が提示するのではなく、当事者や関係者が最初の段階から共に考えるプロセスを実現し、当事者参画の新たな可能性を示す取組みとなりました。

その実現には、想いだけでなく時間・予算・マンパワーが不可欠です。万博という特別な機会だからこそ可能になった側面もあります。しかし、この経験を一度きりの試みに終わらせるのではなく、ここで得られた知見や実践をこれからの社会の中で活かし続けていくことが重要です。

立場や属性の違いを超えて、共に考え、共に創るプロセスの中には、大きな学びと喜びがあります。このプロジェクトに関わった多くの人びとが実感したその楽しさを、これからもさまざまな現場へとつないでいきたいと思います。

【巻末資料】ワークショップ開催概要(全16回)

ワークショップ開催一覧

※開催方法 対:対面 オ:オンライン

年度	回	ワークショップ等	年月日	開催※	移動	トイレ	カーム	展示	運営	情報
2021	1	移動①	2022/3/8	オ	●	-	-	-	-	-
		トイレ①	2022/3/8	オ	-	●	-	-	-	-
		移動② トイレ②	2022/3/14	オ	●	●	-	-	-	-
		カームダウン・クールダウン①	2022/3/14	オ	-	-	●	-	-	-
		移動③ トイレ③ カームダウン・クールダウン②	2022/3/25	オ	●	●	●	-	-	-
2022	2	ヒアリング意見 とりまとめ報告	2022/6/15	オ	●	●	●	●	●	●
	3	みんなでトイレプラン 作成チャレンジ	2022/8/29	対	-	●	-	-	-	-
	4	トイレプラン案の説明と 意見ヒアリング	2023/1/30 2/6,8,16	対オ	●	●	●	-	-	-
	5	展示イメージの ヒアリング等	2023/3/29	対	●	●	●	●	-	-
2023	6	展示計画等の説明と 意見ヒアリング	2023/10/24 11/7	オ	-	●	-	●	-	-
	7	カームダウン・クールダウンの 設備等の確認	2023/11/30	対	-	-	●	-	-	-
	8	みんなトイレの原寸大図面床表示 での案内誘導サイン等の確認	2024/2/29	対	-	●	●	-	-	-
2024	9	ポッドやライドの モックアップ検証等	2024/5/28	対	-	●	-	●	-	-
	10	視覚障がい者個別ヒアリング	2024/7/8,9,11	対	-	●	-	●	-	-
	11	情報保障等	2024/10/15	対	-	●	-	●	-	●
	12	アテンダント研修の進め方	2025/2/14,19	オ	-	-	-	-	●	-
	13	ナビレンスの現地確認	2025/2/22, 3/8	対	-	-	-	●	-	-
	14	アテンダント研修(座学)	2025/3/18	対	-	-	-	-	●	-
	15	アテンダント研修(現地)	2025/3/27	対	-	-	-	-	●	-
2025	-	会期中の確認	2025/7~9月	対	●	●	●	●	●	●
	16	取組み成果の確認	2026/3/2	対	●	●	●	●	●	●

ワークショップ(第1回)概要

- 日時 2022年3月8日(火) 10時00分から12時00分 移動①
2022年3月8日(火) 13時30分から15時30分 トイレ①
2022年3月14日(月) 10時00分から12時00分 移動②・トイレ②
2022年3月14日(月) 13時30分から15時30分 カーム*①
2022年3月25日(金) 10時00分から12時00分 移動③・トイレ③・カーム*②

*カームダウン・クールダウン

○場所 オンライン

- 議題 ・誰もが楽しむ大阪パビリオンの実現に向けて(エキスパート)
・謝金、守秘義務について(事務局)
・パビリオンの概要説明(平面計画、展示ルート、移動、トイレ、カーム*)
・パビリオンの移動、トイレ、カーム*についてヒアリング

○出席者

エキスパート		石塚裕子	
お 困 り ご と 当 事 者 4 人	移動①	車いす使用者5人/視覚障がい者2人	7人
	トイレ①	車いす使用者5人/視覚障がい者2人/精神障がい者1人/ 子育て世帯(支援)1人	9人
	移動② トイレ②	車いす使用者4人/視覚障がい者3人/聴覚障がい者2人/ 知的障がい者の親1人	10 人
	カーム*①	車いす使用者3人/視覚障がい者1人/聴覚障がい者1人/ 精神障がい者1人/知的障がい者の親1人/発達障がい者の親1人	8人
	移動③ トイレ③ カーム*②	車いす使用者3人/視覚障がい者2人/聴覚障がい者1人/ 精神障がい者1人	7人
業務受託者		株式会社東畑建築事務所	
傍聴		公益社団法人2025年日本国際博覧会協会	

○配慮事項

立体コピー(事前郵送)、要約筆記

○議事要旨

ヒアリング項目は、建築の基本設計を進めるうえで確認しておきたい「移動」、「トイレ」、「カームダウン・クールダウン」にテーマを絞り、開催回数は、当事者の発言機会を十分に確保するため、車いす使用者のグループとそれ以外の視覚障がい者、聴覚障がい者、知的障がい者等のグループに分けて5回開催した。ヒアリングでは、最初にエキスパートから「誰もが楽しむ大阪パビリオンの実現に向けて」を説明した。次に、事務局よりパビリオンの概要、平面計画、展示ルートの説明を行った。その後、当事者一人ひとりから意見を聞いた。建築のテーマだけでなく、ワークショップの進め方や展示、事前情報、来館者への対応、災害時対応といったさまざまな意見があった。

当事者からの意見は、事務局がKJ法を用いて項目ごとに分類してまとめ、次回のワークショップで報告した。

ワークショップ(第2回)概要

○日時 2022年6月15日(水) 10時00分から12時00分

○場所 オンライン

- 議題
- ・パビリオンのユニバーサルデザインに関する報告(ヒアリング経過・意見まとめ)
 - ・パビリオンの平面プラン案
 - ・ヒアリングの主な意見と今後の方針
 - ・パビリオンの展示・運営に関するユニバーサルデザインの方向性・検討方法案の報告
 - ・今後の予定

○出席者

エキスパート	石塚裕子			
お困りごと当事者 14人	車いす使用者	5人	発達障がい者(親と参加)	0人
	視覚障がい者	3人	発達障がい者の親	1人
	聴覚障がい者	2人	LGBTQ+	0人
	精神障がい者	1人	医療的ケア児(親と参加)	0人
	知的障がい者(親と参加)	0人	子育て世帯	1人
	知的障がい者の親	1人		
作り手企業	—			
業務受託者	株式会社東畑建築事務所 博報堂・三菱UFJリサーチ&コンサルティング共同企業体(博報堂JV)			
傍聴	—			

○配慮事項

資料のワードテキスト文書(事前送付)、要約筆記、立体コピー(事前郵送)

○議事要旨

- パビリオンのユニバーサルデザインに関する報告
ヒアリングの振り返りと、建築だけでなく展示や運営に関する意見も含め9項目にまとめたことを報告した。
- パビリオンの平面プラン案
基本設計が完了し、平面プランについて、前回からの変更点と展示ルートを2ルートから1ルートに変更したことを説明した。
- ヒアリングの主な意見と今後の方針
ヒアリングでの主な意見と今後の方針を説明した。当事者からは方針に対しての意見や提案があった。
- パビリオンの展示・運営に関するユニバーサルデザインの方向性・検討方法案の報告
博報堂JVから、誰もが楽しみ、快適に過ごせるパビリオンの実現をめざすために、当事者の意見を取り入れ、プロセスそのものも楽しみながら一緒に取り組んで行くことを伝えた。
- 今後の予定
建築は6月から実施設計に着手し、設計の進捗に応じて、案の提示やモックアップ検証を行い、展示・運営は、設計計画の進捗に応じてワークショップ・ヒアリングを行うことを伝えた。また、建築と展示の工事中には現地検証、開幕直前には運営訓練を実施し、万博開幕中には、運営検証、会期後には全体を通じたまとめを行うことを伝えた。

ワークショップ(第3回)概要

○日時 2022年8月29日(月) 13時00分から16時30分

○場所 TOTO テクニカルセンター大阪

○議題 みんなでトイレプラン作成チャレンジ

○出席者

エキスパート	石塚裕子			
お困りごと当事者 14人	車いす使用者	3人	発達障がい者(親と参加)	0人
	視覚障がい者	2人	発達障がい者の親	1人
	聴覚障がい者	2人	LGBTQ+	1人
	精神障がい者	1人	医療的ケア児(親と参加)	2人
	知的障がい者(親と参加)	1人	子育て世帯	1人
	知的障がい者の親	0人		
作り手企業	TOTO 株式会社			
業務受託者	株式会社東畑建築事務所			
傍聴	公益社団法人2025年日本国際博覧会協会 大阪府都市整備部住宅建築局建築環境課			

○配慮事項

事前説明会の開催(資料のワードテキスト文書(事前送付)、要約筆記)、手話通訳、UDトーク、福笑い方式の模型(トイレ案作成用パーツ)、災害補償保険

○議事要旨

●事前説明会の開催(8月25日午前・午後)

みんなでトイレプラン作成チャレンジのワークショップを開催にあたり、事前に説明会を開催した。説明会では、エキスパートからワークショップの趣旨として、これまでの当事者参加のワークショップは、使い勝手や必要な整備について当事者から意見をもらう場であったが、大阪パビリオンのワークショップは、当事者も担い手としての参加を実現し、一緒に知恵を出し、考えていく場を作っていくことと説明があった。また、今回は、トイレブース内の手すりやボタンの位置等を確認するのではなく、トイレの数、配置、動線の3点に絞ってトイレのプランを一緒に考えていくこと、当事者にLGBTQ+や重度の知的障がいがある当事者本人とその親、医療的ケアが必要な方とその親も参加することが伝えられた。

事務局からは、パビリオンのトイレの概要(パビリオン内の位置や周辺のトイレ)について説明した後、トイレのテーマを「誰もが使いやすい、ミライのトイレ」、コンセプトを「トイレの既成概念を変える、チャレンジングで心に響くトイレ」「みんなが自然に使える、壁・境界やバリアのないトイレ」「人の気持ちに寄り添った案内と設備を設けたストレスフリーなトイレ」とし、トイレに対する意識と行動を変えるトイレをめざすことを伝えた。また、当日のワークショップの進め方や流れ、「福笑い方式」の模型を使ったプラン案の作成、必要な器具数の目安及びブースの大きさ等について説明した。

●当日のワークショップ

TOTOのショールームで福笑い方式のパーツに対応したトイレブースを体験し、オストメイト用設備等の実物を確認した。その後、3班に分かれてトイレ案を作成し、各班から発表した。

ワークショップ(第4回)概要

○日時 2023年1月30日(月) 15時00分から17時00分※¹

2023年2月6日(月) 14時00分から16時00分

2023年2月8日(水) 14時00分から16時00分

2023年2月16日(木) 14時00分から16時00分※²

○場所 オンライン ※¹ 視覚障がい者2名は受託事業者会議室 ※² 視覚障がい者1名は京都府視覚障がい者協会

○議題 ・これまでの経過

・トイレプラン案の説明

・カームダウン・クールダウン

○出席者

エキスパート	石塚裕子			
お困りごと当事者 18人	車いす使用者	4人	発達障がい者(親と参加)	0人
	視覚障がい者	4人	発達障がい者の親	1人
	聴覚障がい者	2人	LGBTQ+	1人
	精神障がい者	1人	医療的ケア児(親と参加)	2人
	知的障がい者(親と参加)	1人	子育て世帯	1人
	知的障がい者の親	1人		
作り手企業	TOTO株式会社			
業務受託者	株式会社東畑建築事務所			
傍聴	公益社団法人2025年日本国際博覧会協会 大阪府都市整備部住宅建築局建築環境課			

○配慮事項

資料のワードテキスト文書(事前送付)、単独来場の視覚障がい者を駅から誘導、要約筆記

○議事要旨

● これまでの経過

スケジュール表でこれまでの経過を確認した。

● トイレプラン案の説明

前回のワークショップで各班が作成したトイレプラン案を振り返り、それらの案の考えや込められた想いをもとにトイレの方向性を「ノーマライゼーションを実現するトイレの提案」とすることを確認した。その後、事務局から誰もが分け隔てなく使えるトイレプラン案を提示した。当事者からは、並び方やトイレブースの空き状況等の案内・誘導について多くの意見があった。

● 館内の移動

展示体験ルートについて、途中で階段や段差がなく、すべての来館者が一緒に同じルートで体験できることを確認した。また、ライドをカート型からリフトに変更したことや、スロープの幅員、来館者の避難計画について説明を行った。

● カームダウン・クールダウン

1階と2階のそれぞれの配置と内装や設備の設計方針について説明し、今後ワークショップで詳細を検討することを伝えた。

各議題での当事者からの質問には、次回以降のワークショップで回答することとした。

ワークショップ(第5回)概要

○日時 2023年3月29日(水) 10時00分から12時30分

○場所 TOTO テクニカルセンター大阪(一部オンライン参加)

○議題 ・「UD推進チーム」発足

- ・建築ワークショップの報告(トイレ、カームダウン・クールダウン、避難誘導)
- ・展示ワークショップ(展示イメージの共有、感動した/残念な展示について共有・発表)
- ・今後の予定

○出席者

エキスパート	石塚裕子			
お困りごと当事者 12人	車いす使用者	3人	発達障がい者(親と参加)	0人
	視覚障がい者	2人	発達障がい者の親	1人
	聴覚障がい者	1人	LGBTQ+	1人
	精神障がい者	1人	医療的ケア児(親と参加)	2人
	知的障がい者(親と参加)	1人	子育て世帯	0人
	知的障がい者の親	0人		
作り手企業	株式会社シブタニ、TOTO 株式会社			
業務受託者	株式会社東畑建築事務所 株式会社乃村工芸社・三菱UFJリサーチ&コンサルティング共同企業体			
傍聴	公益社団法人2025年日本国際博覧会協会 大阪府都市整備部住宅建築局建築環境課			

○配慮事項

UDトーク

○議事要旨

●「UD推進チーム」発足

2022年3月からみんなで一緒に考えながら取組みを進め、この取組み・進め方自体がユニバーサルという共通認識を得ることができた。そこで、大阪・関西万博の開幕まで、会期中、閉幕後のフィードバックまでを含めて進めることを確認するとともに、あらたに組織としてチームを発足したいと事務局から提案し合意を得た。また、作り手企業としてチームに参加する3企業を紹介した。

●建築ワークショップの報告(トイレ、カームダウン・クールダウン、避難誘導)

これまでのワークショップで質問のあったトイレ、カームダウン・クールダウン、避難誘導について回答した。また、トイレは、前回のワークショップでの意見を踏まえ、修正・検討する内容を伝えたいので、事務局作成のプラン案の了承を得た。

●展示ワークショップ(展示イメージの共有、感動した/残念な展示について共有・発表)

展示全体イメージの共有後、3班に分かれ、これまでに感動した、または残念だった展示について共有した。事務局や業務受託者も班に加わり、お互いの体験を伝え、意見交換した。その後班ごとにまとめた意見を発表した。A班からは展示を楽しむには「誰もが同じ体験ができる」「五感を使う演出や体験」、B班からは「面白いと不安・恐怖は表裏一体」「取り残されることが無いことが大切」、C班からは「良い展示と思っていたことがストレスの場合もある」「良い展示空間は展示設計だけでは成り立たない」等の意見があった。ワークショップを通じて、設計する側、体験する側の立場の違いやお困りごとの内容・有無によって、感じ方が異なることを共有することで、新たな気づきを得られるワークショップとなった。

ワークショップ(第6回)概要

○日時 2023年10月24日(火) 14時00分から16時00分
2023年11月7日(火) 14時00分から16時00分

○場所 オンライン

○議題 ・今後のスケジュール

- ・トイレの「機能分散ブース」案内誘導のワークショップに向けて
- ・展示「PHRポッド・ミライの自分」のデモ機検証に向けて
- ・協賛企業が企画制作する展示の参考となる展示UD指針案

○出席者

エキスパート	石塚裕子			
お困りごと当事者 19人	車いす使用者	6人	発達障がい者(親と参加)	0人
	視覚障がい者	4人	発達障がい者の親	1人
	聴覚障がい者	2人	LGBTQ+	1人
	精神障がい者	1人	医療的ケア児(親と参加)	2人
	知的障がい者(親と参加)	1人	子育て世帯	0人
	知的障がい者の親	1人		
作り手企業	株式会社サイエンス、株式会社シブタニ、TOTO株式会社			
業務受託者	株式会社東畑建築事務所 株式会社乃村工藝社・三菱UFJリサーチ&コンサルティング共同企業体			
傍聴	公益社団法人2025年日本国際博覧会協会、国土交通省近畿地方整備局			

○配慮事項

資料のワードテキスト文書(事前送付)、立体コピー(事前郵送)、要約筆記

○議事要旨

● 今後のスケジュール

全体スケジュールを確認し、カームダウン・クールダウンルームのワークショップについては、参加する当事者を絞って、仕上げの色や設備の位置を確認することを伝えた。

● トイレの「機能分散ブース」案内誘導のワークショップに向けて

案内誘導のワークショップに向けて、トイレの全体配置とトイレブースの大きさの違い、扉の幅、手すり、オストメイトや多目的シート等の各機能がどのトイレブースにあるのか説明した。また、トイレの内装イメージについても共有した。その後、作り手企業の株式会社シブタニよりトイレブースの鍵と満空表示について、株式会社サイエンスより手洗いについて説明した。

● 展示「PHRポッド・ミライの自分」のデモ機検証に向けて

パビリオンの展示概要を説明し、今後の展示のワークショップではリボン体験ルートの「PHRポッド」と「ミライの自分」について実物大モックアップを使って確認することを説明した。また、事前登録時のユニバーサル対応に関する選択項目と体験への反映や、PHRポッドの操作パネル、モニターの高さやカメラの位置等の検討状況を説明した。

● 協賛企業が企画制作する展示の参考となる展示UD指針案

パビリオンに出展する協賛企業に対して、事務局が示す展示UD指針案について説明した。指針案は博覧会協会のUDガイドラインを抜粋してまとめたもので、それを事前に当事者に照会し、いただいた意見を追記している。協賛企業には、指針案と前回の展示ワークショップで「感動したこと/残念だったこと」の意見をまとめたものも共有する予定であると説明した。

ワークショップ(第7回)概要

○日時 2023年11月30日(木) 14時00分から16時00分

○場所 東畑建築事務所 会議室(一部オンライン参加)

○議題 ・カームダウン・クールダウンルームの仕様の確認
・カームダウン・クールダウンルームの仕様の選定

○出席者

エキスパート	石塚裕子			
お困りごと 当事者 6人	車いす使用者	1人	発達障がい者の親	1人
	視覚障がい者	0人	発達障がい者(親と参加)	1人
	聴覚障がい者	0人	LGBTQ+	0人
	精神障がい者	1人	医療的ケア児(親と参加)	1人
	知的障がい者(親と参加)	0人	子育て世帯	0人
	知的障がい者の親	1人		
作り手企業	—			
業務受託者	株式会社東畑建築事務所			
傍聴	公益社団法人2025年日本国際博覧会協会			

○配慮事項

バリアフリートイレの事前確認(ワークショップ会場にトイレがなかったため、付近のトイレを案内)

○議事要旨

●仕様の確認

事務局から、本館棟の1階と2階にそれぞれ1か所設置するカームダウン・クールダウンルームの位置や大きさ、扉の幅や形といった実施設計の内容を説明した。その後、床に描かれたカームダウン・クールダウンルームの原寸大図をもとに、扉の位置や部屋の大きさを確認した。確認の結果、1階の入口は、車いすでは何回も切り返しをする必要があることがわかり、事務局で扉の幅を再度見直すことになった。鍵については、安全面では設置したほうが良いが、鍵の開閉ができず困る場合もあるとの意見もあったことから、1階は鍵を設置し、2階は鍵を設置せず、扉を開けたままの運用も検討することに決定した。また、横になれるスペースがあったほうが良いとの意見があり、1階にはそのスペースを確保することが決定した。

●仕様の選定

天井、壁、床の内装仕上げの素材や色についてサンプルを用いて確認し、色を選定した。彩度の高い色は落ち着かないという意見から、天井と壁はベージュ、床はグリーンに決定した。また、扉の鍵は、サンプルを使って使いやすさを確認し、レバーが大きく操作しやすいほうに決定した。室内に設置する空調や照明のスイッチの高さは、車いす使用者でも操作できる高さの110cmに決定した。また、呼出ボタンは発達障がい者や知的障がい者が、反射的に押してしまうことがあるという意見があったため、ワークショップ後に事務局で検討した結果、警備員室と通話できるインターホンも設置することとなった。

ワークショップ(第8回)概要

○日時 2024年2月29日(木) 14時00分から17時00分

○場所 大阪府咲洲庁舎 会議室

○議題 ・カームダウン・クールダウンルームの仕様(第7回個別ワークショップの結果報告)

・トイレの案内・誘導(原寸大図面を用いた検証)

・トイレの名称

○出席者

エキスパート	石塚裕子			
お困りごと当事者 18人	車いす使用者	3人	発達障がい者(親と参加)	0人
	視覚障がい者	4人	発達障がい者の親	1人
	聴覚障がい者	2人	LGBTQ+	2人
	精神障がい者	1人	医療的ケア児(親と参加)	2人
	知的障がい者(親と参加)	1人	子育て世帯	1人
	知的障がい者の親	1人		
作り手企業	株式会社シブタニ、TOTO 株式会社			
業務受託者	株式会社東畑建築事務所 株式会社乃村工藝社・三菱 UFJ リサーチ&コンサルティング共同企業体			
傍聴	公益社団法人2025年日本国際博覧会協会 大阪府都市整備部住宅建築局建築環境課			

○配慮事項

資料のワードテキスト文書(事前送付)、駅から会場までの言葉の地図、手話通訳、UDトーク、立体コピー

○議事要旨

●カームダウン・クールダウンルームの仕様(第7回個別ワークショップの結果報告)

2023年11月30日(第7回)のカームダウン・クールダウンルームの仕様選定のワークショップの内容と検討結果について事務局より報告した。

●トイレの案内・誘導(原寸大図面を用いた検証)

検証の前に、3つの班に分かれ、「ピクトや配置図といった案内サイン」について、機能分散されたトイレブースの配置や空き状況はどんな案内やサインがあればわかりやすいか、利用したいトイレブースにスムーズにたどり着くにはどうすれば良いかを議論し、概要を発表した。

次に、トイレレイアウトの原寸大図面を床に広げ、実際に並んで検証を行った。検証では、トイレブースにある程度空きがある状態とすべて使用中で空きの無い状態を確認した。班ごとに議論し、実際に並んで検証したことで、案内サインだけではなく、当事者のお困りごとを知ってもらうことや、みんなトイレのコンセプトをしっかりと伝えることが大切だという気づきがあった。この気づきから、トイレ入口へのコンセプトボード設置につながった。あわせて、通路幅やベビーケアルームの入口の位置が課題として見つかったため、変更を検討することとした。

●トイレの名称

事前に当事者や作り手企業からメールで寄せられた25個の名称案をもとに、各班で意見交換した。最終的に絞り込んだ名称「みんなトイレ」「あなたのトイレ」「考えるトイレ」の3案をベースに、事務局が調整し決定することとなった。

ワークショップ(第9回)概要

○日時 2024年5月28日(火) 13時15分から15時45分

○場所 乃村工芸社 会議室(一部オンライン参加)

○議題 ・みんなトイレのサインと並び方

- ・「リボン体験」の概要説明と実物大モックアップによる確認
- ・今後の予定

○出席者

エキスパート	石塚裕子			
お困りごと当事者 18人	車いす使用者	5人	発達障がい者(親と参加)	0人
	視覚障がい者	3人	発達障がい者の親	1人
	聴覚障がい者	2人	LGBTQ+	2人
	精神障がい者	1人	医療的ケア児(親と参加)	1人
	知的障がい者(親と参加)	1人	子育て世帯	1人
	知的障がい者の親	1人		
作り手企業	TOTO 株式会社			
業務受託者	株式会社東畑建築事務所 株式会社乃村工芸社・三菱UFJリサーチ&コンサルティング共同企業体			
傍聴	公益社団法人2025年日本国際博覧会協会 大阪府都市整備部住宅建築局建築環境課			

○配慮事項

資料のワードテキスト文書(事前送付)、単独来場の視覚障がい者を駅から誘導、立体コピー、手話通訳、UDトーク

○議事要旨

● みんなトイレのサインと並び方

2024年2月29日(第8回)での検証を踏まえ、通路幅の拡幅及びファミリーコーナー入口の位置変更することを報告した。また、みんなトイレの入口手前にコンセプトボードを設置することを報告した。コンセプトボードの記載内容には、外見からはお困りごとがわかりにくい人やどのようなことに困っているのかといった具体事例を記載すべきと意見があった。入口に設置するトイレサインは人型の男女共用トイレのピクトをベースとすることとした。意見を踏まえ引き続き検討することとした。

● 「リボン体験」の概要説明と実物大モックアップによる確認

以前の説明から時間が経過していたことから、あらためて展示内容の説明した後、展示物の実物大モックアップにより使いやすさ等を確認し意見交換を行った。カラダ測定ポッドについては、カメラやモニター位置、出入りのしやすさ、同伴者との入室といった意見があった。ミライのライドについては、乗車人数、映像や字幕の位置、サインについては、文字の読みやすさやルビを振ること等の意見があった。意見を踏まえ引き続き検討することとした。

● 今後の予定

次回は、9月をめどに、展示及び運営・広報を議題として開催することを確認した。

ワークショップ(第10回)概要

- 日時 2024年7月 8日(月) 14時00分から16時30分
2024年7月 9日(火) 11時00分から12時00分
2024年7月11日(木) 15時00分から16時30分

○場所 法人会議室、当事者の職場及び当事者の自宅付近の会議室

- 議題 視覚障がい者への個別説明及びヒアリング ・みんなトイレの満空表示方法
・展示内容の説明
・音声ガイドの利用

○出席者

エキスパート	—			
お困りごと当事者 3人	車いす使用者	0人	発達障がい者の親	0人
	視覚障がい者	3人	発達障がい者(親と参加)	0人
	聴覚障がい者	0人	LGBTQ+	0人
	精神障がい者	0人	医療的ケア児(親と参加)	0人
	知的障がい者(親と参加)	0人	子育て世帯	0人
	知的障がい者の親	0人		
作り手企業	—			
業務受託者	—			
傍聴	—			

○配慮事項

立体コピー

○議事要旨

2024年5月28日ワークショップ(第9回)に出席した3名の視覚障がい者へは当日に十分説明できなかったため、個別に説明とヒアリングを実施した。

● みんなトイレの満空表示方法

空ブースを青く光らせる方向で検討していることを伝えた。「弱視の人には青が理解しやすく、複数の色があるとわかりにくい」「背景は黒い方が見やすい」との意見があった。

● 展示内容の説明

実物大モックアップ検証をしたリフトライドやカラダ測定ポッドの不明点等を確認した。意見として「映像がわからないため、情景を説明する必要がある。細かな内容でなくても、想像を膨らませられるような説明があれば楽しめる」「決まった映像が流れる展示では、音声ガイド(ハロームービー*1、UDキャスト*2等)で楽しむ方法がある」「同伴する家族や介助者が映像を説明するとしても、その説明自体が難しいため、パビリオンのスタッフによる説明が良い」等があった。

● 音声ガイドの利用

視覚障がい者がどのようにスマートフォンを使用するのかを実際に見せてもらい、スマートフォンを活用した音声ガイドの導入について提案があった。

*1 ハロームービー:視覚、聴覚に障がいのある方が音声ガイド、字幕ガイドにより、映画を映画館で楽しめる無料アプリ

*2 UDキャスト:、映画や映像作品に合わせて、自動的に字幕や手話映像の表示、音声ガイド再生等を行うことのできる無料アプリ

ワークショップ(第11回)概要

○日時 2024年10月15日(火) 14時00分から17時00分

○場所 乃村工芸社 会議室

○議題 ・検討報告(展示実物大モックアップ検証の結果、ナビレンスの導入、みんなトイレの入口サインと満空表示モニター)
・ホームページでの事前情報提供

○出席者

エキスパート	石塚裕子			
お困りごと当事者 20人	車いす使用者	4人	発達障がい者(親と参加)	1人
	視覚障がい者	4人	発達障がい者の親	1人
	聴覚障がい者	2人	LGBTQ+	2人
	精神障がい者	1人	医療的ケア児(親と参加)	2人
	知的障がい者(親と参加)	1人	子育て世帯	1人
	知的障がい者の親	1人		
作り手企業	—			
業務受託者	株式会社アクセスムーブコンフォート 株式会社乃村工芸社・三菱UFJリサーチ&コンサルティング共同企業体			
傍聴	公益社団法人2025年日本国際博覧会協会 大阪府都市整備部住宅建築局建築環境課			

○配慮事項

資料のワードテキスト文書(事前送付)、単独来場の視覚障がい者を駅から誘導、手話通訳

○議事要旨

● 検討報告

- ・5月に実施した展示実物大モックアップ検証を振り返り、意見を反映した内容等の検討状況を伝えた。
- ・視覚情報が得にくい人に対して、移動がしやすいように、展示の内容がわかるように配慮するため、ナビレンスを導入することを伝えた。
- ・みんなトイレの入口サインは、さまざまな意見を踏まえ、コンセプトボードとあわせて後日確認することとした。
- ・満空表示モニターは、黒地に白とし、ブースの「空き」と「使用中」の表示をどのようにすればわかりやすいか確認した。

● ホームページでの事前情報提供

ホームページの更新にあたって、必要な情報をわかりやすく入手できるようにするため、事務局で考えた来館前に知りたい情報の項目と内容をもとに意見交換した。また、必要な情報を記載したユニバーサルデザインマップや感覚過敏の方も安心して楽しめるセンサーマップもイメージを示して意見交換した。

● 今後の予定

12月に事前情報提供の案の確認、3月にスタッフ研修を開催することを確認した。

ワークショップ(第12回)概要

- 日時 2025年2月14日(金) 13時30分から14時30分
2025年2月19日(水) 10時00分から11時00分

- 場所 オンライン参加

- 議題 ・アテンダント研修の進め方
・今後の予定

- 出席者

エキスパート	石塚裕子			
お困りごと当事者 18人	車いす使用者	5人	発達障がい者(親と参加)	0人
	視覚障がい者	3人	発達障がい者の親	1人
	聴覚障がい者	2人	LGBTQ+	2人
	精神障がい者	1人	医療的ケア児(親と参加)	1人
	知的障がい者(親と参加)	1人	子育て世帯	1人
	知的障がい者の親	1人		
作り手企業	—			
業務受託者	株式会社乃村工芸社・三菱UFJリサーチ&コンサルティング共同企業体			
傍聴	—			

- 配慮事項

資料のワードテキスト文書(事前送付)、要約筆記

- 議事要旨

- アテンダント研修の進め方

事務局より、アテンダントの研修計画の概要を説明し、当事者がユニバーサルサービス研修にどのように関わるかを説明した。

座学研修の進め方については、アテンダントを班に分け、当事者の体験談をもとに20分対話し、当事者は4回移動することを説明した。意見として「20分は短いため、アテンダント側が知りたいことを事前にまとめておく」「自己紹介カードがあると良い」等があった。

現地研修については、アテンダントをパビリオンの従事場所に配置し、当事者と配置しないアテンダントを2つのグループに分け、実際の応対を確認する進め方とすることを説明した。意見として、「パビリオンの事前情報の提供がどの程度あるか理解しておく必要がある」「班分けの方法に工夫が必要」「当日の意見のアテンダント全員への共有方法の工夫が必要」等があった。

- 今後の予定

座学研修を3月18日に、現地研修を3月27日に実施することを確認した。

ワークショップ(第13回)概要

- 日時 2025年2月22日(土) 14時30分から17時00分
2025年3月8日(土) 14時00分から17時00分

- 場所 大阪ヘルスケアパビリオン(現地)

- 議題 視覚障がい者によるナビレンスの現地確認

- 出席者

エキスパート	石塚裕子			
お困りごと当事者 4人	車いす使用者	0人	発達障がい者(親と参加)	0人
	視覚障がい者	4人	発達障がい者の親	0人
	聴覚障がい者	0人	LGBTQ+	0人
	精神障がい者	0人	医療的ケア児(親と参加)	0人
	知的障がい者(親と参加)	0人	子育て世帯	0人
	知的障がい者の親	0人		
作り手企業	—			
業務受託者	株式会社乃村工藝社・三菱UFJリサーチ&コンサルティング共同企業体 株式会社アクセスムーブコンフォート			
傍聴	—			

- 配慮事項

夢洲駅から大阪ヘルスケアパビリオンまでの誘導

- 議事要旨

- 視覚障がい者によるナビレンスの現地確認

2日に分けて開催し、視覚障がい者各2名が参加し、ナビレンスについて現地で確認した。確認は、実際の体験ルートに準じて、パビリオンのエントランスからスタートし、リボン体験ルート、アトリウム、みんなトイレの順に、仮設置したナビレンスコードの位置と高さ及び音声案内の内容を確認した。

意見として、「ナビレンスの使用方法の説明が必要」「説明内容が細かいと覚えることが難しい」「コードの位置が高いと気づかない可能性がある」等があった。また、「ミライのライドの映像を描写する音声内容については、映像が見えなくても情景を想像することができて良い」との感想があった。

2日間の現場確認での意見を踏まえ、追加での設置や音声内容の変更を進めた。

ワークショップ(第14回)概要

○日時 2025年3月18日(火) 14時00分から17時00分

○場所 ブリーゼプラザ 7階小ホール

○議題 ・アテンダント座学研修
・今後の予定

○出席者

エキスパート	石塚裕子			
お困りごと当事者 19人	車いす使用者	5人	発達障がい者(親と参加)	1人
	視覚障がい者	4人	発達障がい者の親	1人
	聴覚障がい者	1人	LGBTQ+	2人
	精神障がい者	1人	医療的ケア児(親と参加)	2人
	知的障がい者(親と参加)	1人	子育て世帯	1人
	知的障がい者の親	0人		
作り手企業	-			
業務受託者	株式会社乃村工藝社・三菱UFJリサーチ&コンサルティング共同企業体アテンダント			
傍聴	公益社団法人2025年日本国際博覧会協会 大阪府都市整備部住宅建築局建築環境課			

○配慮事項

手話通訳、UDトーク、自己紹介カード、グランドルール(LGBTQ+)

○議事要旨

●アテンダント座学研修

アテンダント業務の従事にあたっての心構えや当事者の案内、誘導方法等学ぶため、当事者の具体的なお困りごとについて、当事者と直接対話する形式で開催した。冒頭、エキスパートからユニバーサルデザインの基調となる講演をし、その後10班に分かれ、アテンダントが当事者の体験談やお困りごと等をもとに20分の対話をし、当事者が班を入れ替わり合計4回の対話を行った。

当事者から、「車いす使用者も一緒に楽しむことが大切」「視覚障がい者や聴覚障がい者への具体的な声掛け方法」「人混みや強い光等に対する不安があること」「困った顔を出さないこと」等アテンダント対応にあたっての留意点が具体的に提案された。

●今後の予定

次回、3月27日大阪ヘルスケアパビリオンの現地で、アテンダント対応を実践形式で研修することを確認した。

ワークショップ(第15回)概要

○日時 2025年3月27日(木) 14時00分から16時00分

○場所 大阪ヘルスケアパビリオン(現地)

○議題 現地研修 アテンダント対応の実践

○出席者

エキスパート	石塚裕子			
お困りごと当事者 19人	車いす使用者	4人	発達障がい者(親と参加)	1人
	視覚障がい者	4人	発達障がい者の親	1人
	聴覚障がい者	2人	LGBTQ+	2人
	精神障がい者	1人	医療的ケア児(親と参加)	2人
	知的障がい者(親と参加)	1人	子育て世帯	0人
	知的障がい者の親	1人		
作り手企業	株式会社サイエンス			
業務受託者	株式会社アクセスムーブコンフォート 株式会社乃村工藝社・三菱UFJリサーチ&コンサルティング共同企業体			
傍聴	公益社団法人2025年日本国際博覧会協会 国土交通省近畿地方整備局 大阪府都市整備部住宅建築局建築環境課			

○配慮事項

資料のワードテキスト文書(事前送付)、手話通訳

○議事要旨

● 現地研修 アテンダント対応の実践

アテンダントが来館者に対応する内容(誘導やお手伝い)を現地で実践するとともに、当事者からフィードバックをもらうことで、ユニバーサルサービスの実践的な対応方法を学ぶことを目的に開催した。

当事者は夢洲駅に集合し、事務局が大阪ヘルスケアパビリオンに案内した。

パビリオンに到着後、事務局から屋外ステージで研修の進め方を説明した。

研修は、アテンダントを実際の従事場所に配置し、当事者は2班に分かれ来館者役となり、記録役のアテンダントとともに、パビリオンの展示ルートを巡り、配置されたアテンダントは案内や誘導を実践した。記録役のアテンダントは、具体的にどのような場面でお困りごとがあるのか、来館者となった当事者が感じたことや提案を記録した。それらを踏まえてUSマニュアルを更新する等、本番に向けて準備を進めた。

あわせて、完成したみんなトイレやカームダウン・クールダウンルームの仕上げも確認した。

ワークショップ(第16回)概要

○日時 2026年3月2日(月) 13時30分から16時15分

○場所 プリムローズ大阪(一部オンライン参加)

○議題 ・ユニバーサルデザインの取組記録誌の概要説明

・取組記録誌に対する意見交換

・メンバー全員から振り返りコメントを発表

○出席者

エキスパート	石塚裕子			
お困りごと当事者 19人	車いす使用者	6人	発達障がい者(親と参加)	1人
	視覚障がい者	2人	発達障がい者の親	1人
	聴覚障がい者	2人	LGBTQ+	1人
	精神障がい者	1人	医療的ケア児(親と参加)	2人
	知的障がい者(親と参加)	1人	子育て世帯	1人
	知的障がい者の親	1人		
作り手企業	株式会社サイエンス、株式会社シブタニ、TOTO 株式会社			
業務受託者	株式会社アクセスムーブコンフォート、株式会社東畑建築事務所 株式会社乃村工芸社・三菱UFJリサーチ&コンサルティング共同企業体			
傍聴	国土交通省近畿地方整備局 大阪府都市整備部住宅建築局建築環境課、大阪府福祉部			

○配慮事項

資料のワードテキスト文書(事前送付)、単独来場の視覚障がい者を駅から誘導、手話通訳、UDトーク

○議事要旨

●ユニバーサルデザイン取組記録誌の概要説明

事務局からユニバーサルデザイン取組記録誌の作成の目的と概要を説明した。その後、作り手企業の株式会社TOTOからみんなトイレのアンケート結果を報告した。

●取組記録誌に対する意見交換

当事者、作り手企業、業務受託者及び事務局が6班に分かれ、下記の4つをポイントに意見交換を行い、各班から主な意見を発表した。

① 記録の漏れや認識に間違いがないか。

② 第2章の取組みの項目や内容に漏れなどがいないか。

③ 第3章は、今後の当事者参画による事業の参考となるよう、UD推進チームがワークショップを円滑に進めるため留意、工夫した内容を記載している。ほかに追加した方が良い内容や、こういう工夫がほしかった等の反省はないか。

④ 第4章の取組成果は、UD推進チームが特にレガシーとして広く発信したい内容のため確認してほしい。

●メンバー全員から振り返りを発表

出席者一人ひとりからこれまでの取組みに対する感想を発表した。

